

「助けられベタ」な日本人

○鉦谷朱理¹・橋本博文²

(¹安田女子大学心理学部心理学科・²安田女子大学心理学部ビジネス心理学科)

目的

これまでの文化心理学の研究によると、日本人はストレスを抱えていたとしても、他者にサポートを求めることができない「助けられベタ」な人々であることが指摘されてきた (Kim et al., 2006)。サポートを享受することは、ストレスを抱える者にとって肯定的に働きかけるはずである。それにも関わらず、なぜ日本人の間ではサポートの要請が躊躇われるのだろうか。

この問いを考える上で興味深い先行研究の一つに、Mojaverian と Kim が行ったサポート受容者の心理に関する研究 (2013) がある。彼女らによれば、アジア系アメリカ人にとっては、自ら要請することなく相手からのサポートを享受するほうがストレスの軽減につながり、またサポートを提供してくれた者に対する好感を強めるという。この知見に基づき、彼女らは要請を伴わないサポートの授受こそが、アジア系アメリカ人や日本人をはじめとする東アジア人の中で一般的であるとの解釈を示している。しかし、この解釈の妥当性については慎重に検討する必要がある。そこで本研究では、Mojaverian & Kim (2013)の概念的追試を行い、要請を伴わないサポートを受け取った場合のポジティブ感情の変化量について再検討するための調査を実施した。

方法

調査対象者 日本人大学生 180 名。

調査項目 Mojaverian & Kim (2013)の研究 2 において用いられた Stressor only 条件のシナリオを和訳したものを統制シナリオとして用いた。回答者は統制シナリオを読んだうえで、このシナリオ状況に自分がおかれた場合のポジティブ・ネガティブ感情の程度を予測し回答するよう求められた。さらに、要請のみ、要請ありサポート受容、要請なしサポート受容に関するいずれかのシナリオ（これらは順に、Mojaverian & Kim (2013)の研究 2 において用いられた Solicited Support 条件、Solicited Support 条件に加筆したもの、Unsolicited Support 条件を和訳したものである）についても呈示され、統制シナリオと同様に、ポジティブ・

ネガティブ感情の程度を予測し回答させた。

結果

ポジティブ感情の変化量を従属変数、条件（要請のみ・要請ありサポート受容・要請なしサポート受容）を独立変数とする分散分析を行ったところ、条件の主効果が有意となった ($F(2,177)=6.23, p<.01$)。多重比較 (Holm 法) の結果、Figure 1 に示すとおり、要請ありサポート受容条件と要請なしサポート受容条件との間には有意な差はみられなかったが、要請のみ条件と要請ありサポート受容条件、要請のみ条件と要請なしサポート受容条件の間にはそれぞれ有意差がみられた ($ps<.05$)。

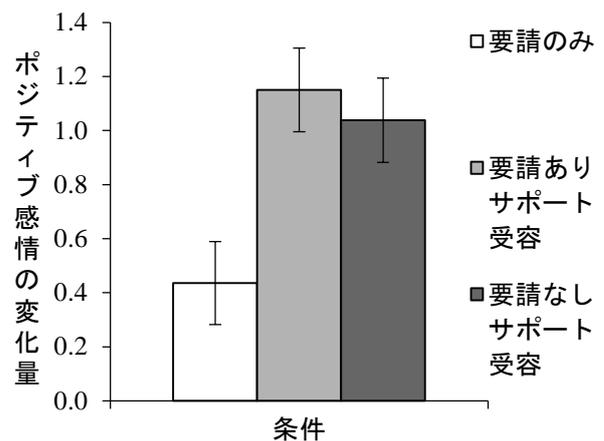


Figure 1 条件ごとのポジティブ感情の変化量

考察

本研究の結果は、要請なしサポート受容条件だけでなく、要請ありサポート受容条件においても、ポジティブ感情が得られることを明確に示すものであった。この結果は、Mojaverian と Kim が示した解釈が誤っている可能性、すなわち、要請を伴わないサポートの授受こそが日本人の特徴であるとはいえない可能性を示唆するものである。実際に有意な差は示されなかったものの、要請なしサポート受容条件よりも、要請ありサポート受容条件の方がポジティブ感情を押し上げるという結果となった。この結果を踏まえ、要請を伴わないサポートの授受に関する日本人の特徴をより明確にしていく必要がある。この点は今後の課題である。